

登録コード	L2830500	開講年度	2026				
担当教員	伊藤 奈津美			副担当			
授業科目	日本語教育学特論						
英文授業名	Pedagogy of Japanese as a Foreign Language: Specialized Study						
授業タイトル	行動中心アプローチの日本語教育と授業設計						
単位数	2	対象学生		講義期間	前期(集中)	曜日・時限	集中・不定期
講義室	人文第5 講義室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	
信大コンピテンシー	非該当						
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素			【授業の達成目標】			
	2 0 2 2 Lカリ, 2 0 2 1 Lカリ, 2 0 2 0 Lカリ						
	【2022年度以前が対象】自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力			外国語教育の動向について、その背景にある考え方や意図、目的を理解し、その考え方に基づく日本語の授業を分析し、設計できるようになる。			
	【2022年度以前が対象】異質・多様なものを理解し、寛容かつ多角的に判断することができる受容力			日本語学習者への日本語教育における教授法・アプローチについて、その教育的意図や特徴を分析的に考えることができる。			
	2 0 2 6 Lカリ, 2 0 2 5 Lカリ, 2 0 2 4 Lカリ, 2 0 2 3 Lカリ						
	【2023年度以降が対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。【思索力・受容力・批判力】			第二言語としての日本語指導におけるコミュニケーション活動とその教材作成や、日本語教師に必要な知識や指導技術を具体的に検討できる。			
	【2023年度以降が対象】必要な情報を的確に収集し、理解し、発信する力が身についている。【メディアリテラシー・コミュニケーションリテラシー・外国語能力】			日本語教師としての役割を理解し、授業活動だけではなく、パフォーマンス評価、ICT活用と著作権へ配慮を前提にコース全体を検討できる。			
授業で学べる「テーマ」	多文化協働、キャリア						
全学横断特別教育プログラム							
授業の概要	授業では、日本語教育の参照枠の基盤となったCEFRの概念と理論的背景を学ぶ。その理解に基づき、行動中心アプローチを踏まえた日本語授業の設計原理と方法を扱い、授業設計上の要点を整理する。あわせて、コース全体を見通した評価設計、教材作成における著作権の基礎知識、コミュニケーション活動の計画・運用における留意点を学び、総合的に授業を設計できる力の育成を目指す。						
授業計画	第1回：オリエンテーション／外国語教育の動向 - CEFRとCan-do - 第2回：日本語教育の基盤：日本語教育の参照枠 第3回：日本語教育の基盤：課題遂行能力とCan-do 第4回：日本語教育の基盤：行動中心アプローチとコミュニケーション・アプローチ 第5回：授業設計：Can-doの記述 第6回：授業設計：第二言語習得プロセス 第7回：授業設計：事例『みんなの日本語』を分析する 第8回：授業設計：事例『まるごと 活動』を分析する 第9回：授業設計：事例『まるごと 理解』を分析する 第10回：授業設計：初級の授業を設計する 第11回：授業設計：IDで授業設計を可視化する 第12回：授業設計：テストとパフォーマンス評価 第13回：授業設計：ルーブリック評価を考える 第14回：授業設計：ICTと著作権 第15回：まとめ・授業のふりかえり（授業アンケート） なお、本授業の計画および最終レポートについては、受講学生の理解度により、取り上げるテーマや各回の計画を変更することがあり得る。 授業日 9月7日（月）～9月11日（金） 各1限～3限						
成績評価の方法	以下の3点とその割合によって、先に挙げた本授業の目標の達成度を測り、評価する。 授業15週の授業への参加度（50％）・課題（20％）・授業15週終了後の最終レポート提出（30％）、最終レポートでは、15回の授業で取り上げた事象について論述を求めます。						
成績評価の基準	授業での質疑応答や討議に積極的かつ能動的に準備し参加できることに加え、最終レポートにおいて、授業で学んだ基本的概念を基に正確かつ論理的に説明できれば、本授業の達成目標の「水準にある」と判定する。加えて、適切な具体例を挙げられるならば水準の「やや上にある」とし、基本的概念と具体例を統合的に用いて応用的に説明できるならば水準の「かなり上にある」と判定する。さらに、授業で扱った諸問題が複合的に見られる課題について、具体例を挙げつつ、重要な基本的概念を統合的に用いて応用的かつ発展的に論じられる場合は水準を「卓越している」と判定する。						
事前事後学習の内容	各回の授業内で取り上げたテーマやトピックに関して、発展的に考えたり調べたりすることを求める。また、自身の経験や意見をまとめることを求める。以上の課題は、授業を行うなかで意見発表や討論に用いる（オンラインで提出）。						
履修上の注意	講義に加え、グループワークを行う。正解を求めるものではなく、自由な意見交換を行うことを希望しており、授業への積極的な参加を望む。						

質問、相談への対応	授業の前後あるいはメール（itohnatsumi06@gmail.com）で対応する。
教科書	使用しない。授業の中でレジュメや資料などを配布する。
参考書	『CAN-DOで教える 課題遂行型の日本語教育』（来嶋洋美・八田直美・二瓶知子著、三修社、2024年）そのほか、授業内で適宜、紹介する。